



寺報 ともしひ

金剛山大長寺
令和四年四月二十二日発行
第十七号



—三月、康哉住職の近影—

童謡詩人 まどみちお 先生の世界

「仏のこころ、

詩（うた）のこころ」

安藤 康哉（大長寺小住）

最近、まどみちお氏の「うたをうたうとき」という詩に出会ったことが出来た。

その時、私は目から鱗がおちるという大変な感動を受けた。詩とはなにか、詩の世界、詩の心とは何かと私自身はじめて自問自答し、詩そのものの本質が何であるか探求する機会を得た。先生の歌を紹介する。

「うたを うたうとき」

うたを うたうとき

わたしはからだをぬぎます

からだをぬいで

こころひとつになります

こころひとつになつて

かるがるとんでいくのです

うたがいきたいところへ

うたよりもはやくそして

あとからたどりつくうたを

やさしくむかえてあげるのです

わたしはからだをぬぎます

【次頁へ】

この身体を脱ぐとは、世事
世情のしがらみや、利害得失、
私利私欲の煩惱から脱却して
無垢聖女の心になることであ
り、そのことがすなわち心が
一つになるということである。
そうなると、心そのものの
の存在すらも忘れて無心にな
ることであり、道元禅師のお
言葉の中に「わが身をも、心
をも放ち忘れて、仏の家に投
げ入れて、仏のかたよりおこ
なわれてこれにしたがいもて
いくとき」というまかせきつ
た世界、身心脱落の世界が出
現するのである。

特別志納者の紹介



実にすばらしい着想から出た詩（うた）ではないだろうか。

まどみちお先生の追究して
いる詩の世界は、まさにこの
身心脱落の世界であることを
「うたを うたうとき」の詩
が暗示しているようと思う。
こころひとつになつて軽々と
大空を飛来することが出来る
自由自在の詩の世界である。

うたが、いきたいところへ
うたよりもはやく、自分が
たどりつき、やさしくむかえ
あげたいという、ここでは、
詩と自分とが一応、個別の存
在として関係づけ、客体化し
た存在として位置づけている
が、実はうたと自分とはそこ
になんの隔たりもない一体化

した無分別の世界、自分がうたであり、うたが自分であるという同一化したこころの世界が出現しているのである。

詩の世界では、この世に生起するどんなものでも、尊い命のあかしであり、各々の存在が存在すべき意味と価値をもつてているのである。だからこそ、そこに詩のこころがあり、詩の世界が出現するのである。

まどみちお先生の次の詩、「つけもののおもし」はそのことを端的に、具体的に物語つてていると思うのである。

つけものの おもし
あれはなにしている
あそんでいるようで
はたらいているよう
おこつてるようで
わらつてているようで
すわつてているようで
ねころんてるようで
ねぼけてるようで
りきんてるようで
こつちむきのようで
あつちむきのようで
おじいのようで
おばあのようで
つけものの おもし
あれは なんだ

お通夜の意義について

大長寺院代 安藤 嘉則

新型コロナ感染症は私たちのさまざまな日常生活を変えてしまい、お葬式では、通夜を行わない一日葬も見られますが。「通夜」という言葉 자체は「夜通し」という意味が含まれ、その起源は殯（もがり）という古代からの儀式にさかのぼり、それは死者を送り出すまで付き添い、棺に安置しを慰めるものでした。

昭和の時代には自宅に僧侶を招いて通夜読経を行い、遺族が一晩中ろくなぞや線香を焚き故人を見守るといったことが行われていました。今は住宅事情も変化し、葬儀会場は自宅から葬儀会館となり、葬儀の執行も地域の相互扶助から葬儀社主体になりました。

弔いとなると、本来葬式に参列し焼香していた、勤め先の関係者などが大勢焼香に参列するようになり、喪主の方が読経中、焼香される方たちに向かって繰り返し頭を下げるという光景が見られました。

つまり遺族が故人に向き合はず、会葬者に挨拶するためのお通夜の儀式になってしまったのです。

また葬儀会館やホールでお通夜を行わない一日葬も見られますが、「通夜」という言葉 자체は「夜通し」という意味が含まれ、その起源は殯（もがり）とい

う古代からの儀式にさかのぼり、それは死者を送り出すまで付き添い、棺に安置しを慰めるものでした。

しかしこロナ禍となると、三密を避けるということで、遺族・親族に限定され、外部の方が参列できないのであれどが行されていました。今は家族だけでの通夜の方が多いことなので、逆に今の意味をもつてているのです。

方よりも本来の通夜のあり方に近いといえるのです。会葬者が来ないから通夜をやらなければなく、むしろ近親者のみだからこそお通夜をする意味があるといえるのです。

お葬儀は故人が仏さまの御弟子になつて永遠の仏の世界に安住いただくための儀式です。その前提として、お通夜には仏の教えを読経し、その上で葬儀のとき、仏の戒法と戒名をお授けします。葬儀のとき、導師は「衆生、仏戒を受ければすなわち諸仏の位に入る。まことに是れ諸仏のみ子なり」という言葉を繰り返し唱えます。真に仏の世界へ歩んでいただくための確認の言葉です。

その意味でお通夜での読経は、故人が仏弟子としての歩みを進める前提として、大切な意味をもつてているのです。



この「絵本」を希望される方は大長寺にご連絡下さい（無料ですが数に限りがあります）

『みんなのさかわがわ』紹介

大長寺文化部

大長寺の近くを流れる酒匂川と流域を描いた絵本です。

環境省の「つなげよう支えよう森里川海」プロジェクトと酒匂川水系保全協議会六十周年記念事業の一として制作されました。また、流域の多くの方の協力もありました。

大長寺の創設は四八一年前で（一五四一年）現在の開成水辺スポーツ公園近くです。水害で本堂が流出して（一七一年）、現在地へ移転（一七二五年）、その後に墓地移転（一七五八年）をするなど、お寺は川と地域とともに、歩んできました。

酒匂川の水は流域の生活を支え、また県下に配水されて文字通り命の水になっています。これからも守り続けたいものです。

ご逝去の方々と命日

故 井上 清美 様	行年 八十歳	令和三年十二月十八日没
施主 下島 井上 實 様	行年 六十六歳	令和四年一月二日没
施主 上島 長嶋 慶以子 様	行年 七十九歳	令和四年一月三日没
施主 下島 辻村 多鶴子 様	行年 九十年	令和四年一月十一日没
施主 南足柄市 落合 邦男 様	行年 九十年	令和四年二月二十二日没
故 沖山 和子 様	行年 九十歳	令和四年一月十六日没
施主 小田 原市 沖山 真澄 様	行年 四十年	令和四年一月十六日没



故 長嶋 一治 様	行年 六十六歳	令和四年一月二日没
故 辻村 謙治 様	行年 六十六歳	令和四年一月三日没
故 青井 弘子 様	行年 八十七歳	令和四年二月四日没

故 小野 菊江 様	行年 百歳	令和四年一月三十日没
施主 中家村 小野 敏晴 様	行年 八十七歳	令和四年二月四日没

故 大津 玲子 様	行年 九十一歳	令和四年二月十二日没
故 小野 正次 様	行年 八十八歳	令和四年二月二十二日没

昨年、初めての試みとして大長寺にて花まつり茶会を開催致しました。大変好評につき、今年も四月三日に第二回の開催をする運びとなりました。お茶数寄者会の欠庵会が中心に大長寺を会席にして、コロナ禍の為、感染対策は万全を期して人数限定五十名のお客様に参加頂きました。皆様にはお茶のお席を満喫し、楽しんで頂けました。

大長寺としてもお席を持たせて頂き、手作りの酒饅頭と茶箱のお点前で、おもてなしを致しました。

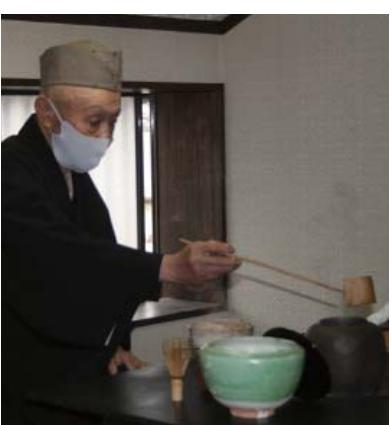
これからは檀家様にも、花まつりの一環としてお皇茶等のご提供が出来たらと思います。来年は、コロナが収束すれば、希望する檀家様にもご案内できればと存じます。

『文化』花まつり茶会を開催

大長寺 小澤宗提



大長寺席



欠庵さんの席



徳増席